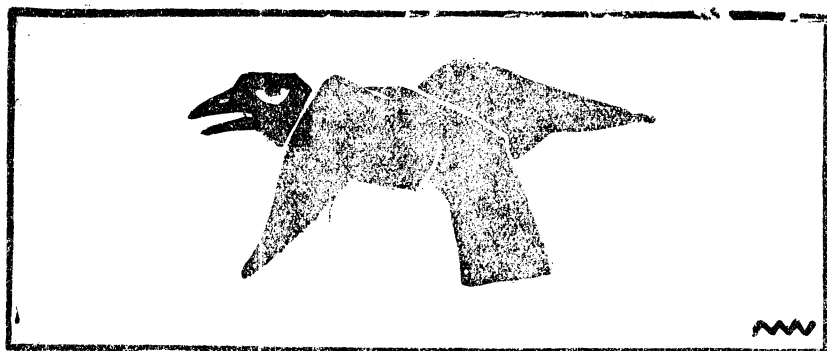




社會悲劇 三角畑

(禁斷興行)

岩野泡鳴

登場人物

百姓 甲 (四十歳前後)
 女房 甲 (三十五六歳)
 百姓 乙 (五十歳以上)
 女房 乙 (四十七八歳)
 通行人細君風 (二十三四歳)
 同 老母 (五十歳以上)
 巡查

その他に、無言若しくは有言の仕出しの御用聴き並に牛乳配達各一名

場所

東京の郊外

時

六月の初め、曇天の午後

「鐵道線そばの畑地で、舞臺に向つて右の方は鋭角の三角形に迫り、反對の方へは開いてゐる。この鋭角の方に電柱が立つて、倒れぬ爲めに針がねが引つ張つてある。それから畑の向ふ側に細い眞ツ直ぐな道路があり。人の丈ほど延びた檜葉の苗木の植ゑ込み。その後ろから見える二階の裏手。こちら向きの小さい平家。これに隣つての、これを小さい二階家。かかる景が舞臺中央の奥の方で切れて、眞ツ直ぐな道路のあなたは青葉の桃畑。そのまた向ふの方から、山の手線の鐵道シグナルのあたまで見えてゐる。」

「向つて左り手の奥に、檜葉の間から二階家の横手が見える。そのこちら、後ろも、すべて畑の體。舞臺左り手の前方にも、枳殼の生垣で囲んだ小さい平家の裏手の隅なる便所のところが見える。この家の横手から、奥の方の道へ、直角に道路がついてゐるので、正面の畑は不等邊三角形になつてゐる。」

(一) 百姓甲、酒屋の御用聽き

「酒屋の御用聽きらしいのが、物を肩にかけて、自轉車を、向つて右の三角點から乗り入れ、あぶなツかしさうに舞臺の前方を眞ん中ごろまで来る。」

百姓甲「今氣が付いたやうに鉄の手をやめて、舞臺中央少し奥から時勢な瘦せた顔をその方に向けて、とがった聲で」 通るない！

「御用聽きは無言で驅け抜ける。」

百姓甲 畜生！「暫らく黙んでゐてから、また鉄を動かす。」

(二) 百姓甲、牛乳配達

牛乳配達「奥から左り前方への道路を、配達車をがら／＼云はせてやつて来て」 今日こんちは。

百姓甲 ……………「ふり向いた時には、もう、配達は知らぬ顔でずん／＼行つてしまふので、またいま／＼しさに暫らく黙ってから、鉄を動かす。この動かし方が焼け氣味であつた。」

(三) 百姓甲、その女房

女房甲「これも瘦せた方で、血色のよくない顔で、薩摩芋の芽を入れた籠をかかへて、向つて右の三角點に現はれ」 お父さんとッ、まんま喰はねいか？

百姓甲 ……………「ふり向きもしないで、鉄を使つてゐる。」

女房甲「奥への道路から渠の方へ近づきながら」 腹が減りやアしねいかよ？

百姓甲 ……………「矢張りふり向きもしない。」

女房甲「その道ばたに近いところを渠がうなつてゐるのを見て、立ちどまつたが」 もツとよくあうなひよ。いつものやうにやア行つてゐねいぢやアねいか？——もう、ドンも餘ツ

ぼど前に鳴つたがよ。

百姓甲〔見向かないで、低い獨り言のやうに〕 あらアめしも喰ひたくねい！

女房甲 そんなことを云つたつて、腹が減るがよ。ちよツくら行つて來なよ。そのうち、わしやアそこまで植ゑ付けて置くが――

百姓甲〔同じ態度のまま〕 うちへも行きたくねい。

女房甲 そんなに嫌はねいで、さ、わしの娘は父さんととの娘ぢやアねいか？ ゆふべからあんな怪我をして足が立てねいのに、可哀さうでねいかよ？ ちよツくら行つて、ちよツとでも愛相云つてやんなよ。親でもねいやうに――まだ痛いいてつて、寝たツ切りぢやアねいか？

百姓甲〔まだ同じやうに鐵を動かしながら〕

あいつも天罰を受けやがつて――もう、どうせ、一生寝たツ切りだらう、さ。見たくもねい！

女房甲〔多少引き入れられた様子で〕

天罰ッたら、天罰だら

う、さ。父さんととが行くたと云ふのに、毎晩めいばん、夜這よづみひに行きやアがつて――歩けもしなくなつた片輪かづちに、若し子でも出來たら、どうするだらう？ あひさの久原ひさはらの旦那も物好きな、人の娘を毎晩めいばんあのと、自分の右手前方をちよツと見やつて〕廣ッばで自由にして、さ――早く金にでもしてやんなよ、いい療治も出來ねいぢやアねいか？

百姓甲〔矢ッ張り鐵の手を休めないで〕

いい療治が出來ねいから、一生の片輪さ――あらア都會の人とにやア一文でも世話にならねい。あいつ等の尿でも小便でも、禮をして買つてらア。

女房甲

それだから、世間から馬鹿正直ましかちだと云はれるのだよ。矢澤の作兵衛ぢぢイを見なよ、近處のお屋敷へへい／＼云つてあたまを下げて行く代りにやアそこいらの肥はただで貰つてゐるし、おもちやのやうな畑をうなつてやつても一圓や二圓にやアなるし、たまにやア下手な庭づくりや植木屋の眞似もしてゐ

らア、ね。

百姓甲 「初めて鉄の手を休めて、女房の方を眺むやうに見て」 おら

ア作兵衛のやうな、出来合ひの植木屋などアしねい

！今は小作でこそあれ、それでも親代々から正眞

正銘の百姓だ！

女房甲 百姓は百姓に相違ねいが——

百姓甲 だから、あらア都會くさい奴らア嫌ひだ！

鐵道が引けるツて土地をへずられ、——屋敷が立つ

ツて地面を削がれ、——賣り地にするツてもとの畑

に草を生やしッ放しにして、——電氣が来るツて大

きな柱などを立てて、さ、あら達のいのちア段々變

挺な物になつてしまはア！おまけに、道でもねい

道を付けアがつて——どうせ踏まれるから、そこだ

け明けて置くものの、たださへ減つた地面がまたそ

れだけ使へねいんだ。

女房甲 だから、作兵衛なんか商賈換へをしねいぢや

アと云つてさうだ。

百姓甲 馬鹿野郎！ あいつらア植木屋にでも、乞食

にでもなつてしまへ！「と、投げ出すやうに云つてから」お

らアつくれ一つにかじり付いても、百姓をすらア

！「手につばを吐いて、また鉄を持つ。舞臺正面の向つて左りの方

へ、すぢかひにうなひ下つて行くので、かの女からは段々遠ざかる。」

女房甲 そりやアさうだとも、さ——だが、行つて來

なよ。

百姓甲 ……………

女房甲 まんまを喰はねいと毒だア、ね。

百姓甲 ……………

女房甲 いいか、ね——？「心配さうに。」

百姓甲 「獨り言のやうに」かまうもんか？

女房甲 でも、ちよっくら行つて來なよ。それに、あ

の兒も何か父さんに話があるツてがよ——随分利か

ねい兒であつたが、ゆふべから急に氣が弱くなつて、

さ。

女房甲 「矢ッ張り獨り言のやうに」天罰だア、ね、——親の苦

勞も知らねいで！

女房甲「渠の鉄のあとを見ながら」もツとよくうなつて行きな

よ、去年ほど根がつかないと困るぢやねいか？

百姓甲 どうせ年々身入りは減つて行くの、さ。

女房甲 そりやア、畑が段々狭くなりやア、せめて深

くでもうなはねいと、さ——

百姓甲 高が芋畑だ！

女房甲 外の物だツて、何ほど出来ようぞ？

百姓甲 ……………「正面向きになつて、今度は一つ、向つ

て右手の方へ、後ろ下がりにうなひ初める。」

女房甲 ちよつくら行つて来なよ。

百姓甲 うるせい！

女房甲 天罰ツても「と、何だか 考へてるやうに」——で

も、父^とさんが悪いんだぜ、あんなところに大きな穴

など掘つて、さ——

百姓甲 ……………

女房甲 うめて置きなよ。あぶねい。自分の見に限ら

ねい、誰でもまた落ッこちるか知れねい。

百姓甲「ますく焼け氣味になつたのが鉄の使ひ方に見えてたが」え

え！「と、鉄を引き抜いて」もツと深くしてやれ！「つか

くと畑のおもてを渡つて、向つて右手の三角點の方へ進み、角

の針がね押さへの横から、この針がねが引ッ張つてる電柱のこ

ろまで、舞臺正面に添つて掘れてる長い穴を、一層深く掘り起す。」

女房甲「半ば呆れ、半ば心配さうにやつて来て、掘れる穴をのぞくやう

にして」あの兒が落ッこちたばかりぢやアねい——外

に誰れかもやつたか知れねいツて！ よしなよ。あ

ぶねい。

百姓甲 なアに「と、因業な顔つきと口調とを以つて」人の云

ふことを聴かねいやつ等ア、みんな足でも手でも挫^く

いてしまふがいい、さ！ ここはおらんとこの借り

た地面で、道路ぢやアねい。

女房甲 でも「と、のツソリ渠の横顔を見あげて」やつたかも

知れねえ——あぶねい。

百姓甲「鉄を左りの手に頑固に引ツまげたが、かの女の方は見ないで、

心持ち正面を向き」かやうもんか！「向つて左り手の方へ、畑

の中を、時勢な様子で一二歩あるく。」

女房甲「掘れた穴をあぶなツかしさうにのぞいて見るやうにして、三角

點をまはつて、穴のそとを正面の道へ来て」ちよツくら行つて
来なよ。

百姓甲「かの女が正面前方の道へ來たのに氣が付いて」手前^{てまえ}まで這

入りやアがつて——道路ぢやアねい！

女房甲「立ちどまつて、少しきまりが悪さうに」でも、どうせ踏

まれてしまふところだ。

百姓甲 踏むやつ等が不埒なんだ！

女房甲「渠がまたもとのうなひ場所に行かうとするのを見やつて」い

いか、ね——腹がへつても？毒だによ。

百姓甲 考へても見ろ、鐵道が敷けるやうになつて、

あツちが「と、右の手で後ろ向きて舞臺右手の方をさし」引ッ

裂かれたのが初めて——あすこにも「と、舞臺左り手の

方を自分の右の手でさし」家が建つ。こツちも「と、鐵を正

面から自分の左りへ十分に向けて、檜葉の植ゑ込みの方をさして」敷

地に取られ。とう／＼この前も「と、正面を鉄でしやくつ

て見せ」こんどまた家になつた。百姓の頼みとする烟

を都會攻めにして、あらの命までも今にここから追

ッ拂はうとするのアドいつだ、畜生！この烟のさま
を見ろ！「舞臺の中央に正面を向き、左りに持つてた鐵を右に持

ち換へると同時に、土の上に置いて、鐵の柄を杖に突き、左右を見ま

はしながら、餘ほど感に入つた聲で」狭くツても、四角なら

まだしもゆとりがあらう——出來をくねいの三角と

ア、お前^{めい}——

女房甲 三角だツて、四角だツて——「軽く獨り言のやう

に云つたが、多少釣り込まれたかのやうにしほ／＼と、舞臺左り手の

方へ、烟へ觸れないで歩きながら」正直にかせいでゐりやア

圓くなつて行かア、ね。

「かの女は舞臺左り手なる前方の隅から起る道路に添つた第一のうね
に行く、初めて烟へ這入つて、正面に向つて、第一うねのあたま

を踏ぎ、持つて來た籠なる芋の芽を植ゑ初める。電車の過ぎる音。」

百姓甲 ……………「正面向きに鐵を突いてつツ立つてゐたまま、
舞臺向つて右手の奥を、きツとふり向いて瞰む。」

女房甲「第一うねを半分ばかりさがつて行つたところから、渠の横向き

姿をヂツと見て、芋の芽を持つた手を忘れたやうにして」お前^{めい}さ

んは、けふ、餘ッぽどどうかしてるんだよ……こん

なうなひ方ぢやア困るぢやアねいかり？「また下を向いて

土くれを手でこわしながら」もツとこまかにしねいぢやア
——「一つ、あとずさりをする。」

百姓甲 文明開化とア人のいのちを縮めたり、人の娘
を夜這ひさせたりすることけい!

女房甲 「一心に土くれをこわしながら」 それでも電車などが出
來て、近頃ア便利になつた、さ。

百姓甲 便利過ぎて、あら達にやア不便だ!

女房甲 お父^とさんは出て見ないから、さ、ね。

「百姓甲も元のところへ納まつて、不精無精に鉢を續け初める。」

(四) 百姓乙、百姓甲、女房甲

百姓乙 「肥桶をおもさうにかついで、穴のある方に現はれ、穴の外がは
を、穴の長さの半分ばかり來たところで踏みとまり、百姓甲の方をぢ
ツとおそろしさうに見やつて——これはふとつた顔付きだ」 通らし
て貰ひます。「また進み出す。」

百姓甲 …………… 「休めた鉢の柄を固く握つて、からだを延ばし、ぢ
ツと乙を憎々しさうに見詰めてゐる。」

女房甲 …………… 「これも意地悪さうに見詰めて、立ちあがつたが、
第二のそれに渡つて、直ぐ奥のうね先きを舞臺に尻を見せて跨ぐ。」

百姓乙 …………… 「その道を半分以上も來たところで呼びとめられ

る。」

百姓甲 あい、植木屋!

百姓乙 「踏みとまつて、顔だけをその方に向けて」 おらア何も植
木屋ぢやアねい。

百姓甲 百姓が植木屋のやうな手間取りをするのが文
明開化けい?

百姓乙 そんな因業なこと云ふな——お互ひにこんな
世になつたから、百姓してゐるばかりぢやア喰へね
いんぢやアねいか?

百姓甲 そりやア、お前^{めえ}のやうな都會ものにへい
云つてくやつ等の云ふことだ。

百姓乙 それでなさやア喰へねい、さ——お前^{めえ}のやう
に強情でも困るぢやアねいか、あすこにあんな大き
な穴を掘つて、さ、夜など歩くにあぶなツかしいツ
て、お屋敷がたでこぼしてゐるぜ。

百姓甲 通るべき道路ぢやアねいんだ!

百姓乙 それが、さ、どんなところだつて、人が通り

出しやア仕方がねい。おらの烟などア、大事な眞ン中を突き抜けられたア、な。

百姓甲 お前のやうな、都會ものの世話になるやつ等にやア仕方がなからうが、おらア都會は怨敵だ！

百姓乙 それでも、あんまり因業だから、お前のわなに
お前の娘がかかつたぢやアねいか？

百姓甲 そんなことアお前の厄介にやアならねい——
二度とそこを通るな！

百姓乙 そりやア、然し、無理だぜ。

女房甲 作兵衛さん（と、立ちあがつて、その場に正面に向きなほり）おらんとこの娘のことを云つたが、ね、お前んとこの娘のさまを見ろよ——どこへ奉公に行つても、氣儘で勤まらないから、また歸つて來てるぢやアねいか？

百姓乙（「むつとしたが、わざとおとなしく出て」あれにも困るが、
まア、おの穴を埋めて置くがいいぜ、功德にならア。

女房甲 うちのことなど云つて貰はねいでもいい！

百姓甲 二度と通るな！

百姓乙 ……

〔乙はあとをかまはないで、舞臺向つて左リの方へ這入る。あとの二人は暫らくその方を見詰める。〕

（五）女房甲、百姓甲

女房甲 なんていめ／＼いぢぢイだらう？

百姓甲 今度通つたら、ぶんなぐつてやるがいい。

女房甲 人の娘のことばかり云やアがつて、あいつの

うちのアどうだ——さまだけでも見やアあるがいいさ。——でも、ほんとにお前さん、ちよっくら云つて來ねいでもいいいか？

百姓甲 かまうもんか！

〔二人はまた仕事にかかる。〕

（六）通行人若い細君風、老母、百姓乙、

甲、女房甲

細君風（若い作り、舞臺奥から、向つて左リ手前方の道路を、老母のさきに立つて、ちよこ／＼と出て來て、百姓乙のあとを呼ぶ。）作兵衛

さん——作兵衛さん！

百姓乙「また同じ様子で出て来て」へい、今日は。^{こんち}「舞臺向つて左
り手の三角點のところに立つ」

細君風「奥からの道にゐて」今出て行くところで、見えな
かへんだのだが、ね、娘さんの奉公口は——聽いて
あげたが——駄目ですとよ。

百姓乙 さうですかい？

細君風 折角いいところだと思つて聽いてあげたんだ
が、ね、あの兒なら、氣まままでどうせお尻が落ちつき
ッてがないッて、ほかさまへもよく分つてゐるが、ね——
——そんな兒ぢやア仕やうがないぢやないか、よく云
つて聽かさないぢやア？

百姓乙 へい——あれにも困つてをりますので——

細君風 よく云つて聽かせておやりよ、本人の爲めに
もなるまいから——誰れだつて、そんなぢやア使ひ
手はない、わ、ね。

百姓乙 へい——

老母 ほんとに、本人の爲めにやアならないよ、よ

く云つて聽かさないぢやア。

百姓乙 へい——

百姓甲「いい氣味だと云ふやうに、女房甲と共に、じろくを見てゐた
のが、獨り言のやうに」ざまア見ろ！

細君風「ちよッとその方に氣を向けてから」それに、あの、うち
の垣根はいつ直して呉れるんです、ね、旦那がぶつ
く云つて困るぢやアないか、ね？

百姓乙 へい、きのふ、けふ、少し茄子苗の方でいそ
がしう御座いますので——

老母 早くしないと、いけないよ。

百姓乙 へい。

女房甲 ほんとに、植木屋か庭造りさんだア、ね。

細君風 ぢやア、頼みますよ。

老母 あの兒にも云つてお聽かせよ——今時、そん
なに氣まますぢやア人の信用が置けない、わ、ね。

〔細君と老母とは前方の道へ出る。百姓乙はもとの通り退場。〕

(七) 老母、細君風(百姓甲、女房甲)

老母「先きに立つて行く細君風に」實に、あんな兒だとは思

はなかつたが、ね——ちよつと見るといい兒だが——

細君風「穴のところまで来て、のぞき込みながら」おッ母さん、

また深く掘りましたよ。「斯う云つて、百姓甲の方を見る。」

老母「も、そのそばへ行つてから、のぞきながら、百姓甲に當て付け

るやうに」ほんとに、ひどいんだ、ね——村役場の方

で時々見まはりに來ないからいけない。誰れが落ッ

こないとも限らないのに！

細君風「思ひやりのないものがあるからいけないのだ

わ。

老母「さうだとも、ね。」

「ちよつとまた二人は百姓の方を見る。百姓甲も、女房甲も、段々、

向つて右の方に仕事を寄せて來てゐた。細君風、續いて老母、退場。」

(八) 百姓甲、女房甲

百姓甲「二人退場の方を苦々しさうに見てから、獨り言のやうに」自

分の娘がちんばになりやア、もう、どうしたッてこ

つちに罪ア來るものか？

女房甲「あんないい奥さんを持つて、全體、あの旦那

はどうしたと云ふんだらう——百姓の娘なんか手

を付けて？

百姓甲「女房の言葉には頓着せずに」おらア喰へなくなつたら

東京中を焼き拂つてやらア！

女房甲「金にしてやんなよ——今のうちに——もう、

いよ／＼片輪になりやア、あの兒も嫁にやア行けね

いや、な、可哀相に！

(九) 女房乙、百姓甲、女房甲

女房乙「てツぶり肥えた方、籠に茄子の苗を入れて、それをかかへなが
ら、穴のある三角點に現はれて」通して貰ひます。

「この時、また電車の響きがする。」

百姓甲「響きの方を蹴んでからだを延ばした勢ひが、女房乙に對する荒
々しい返事になつて——もう、穴のある三角點の近くを前向きにうな

つてゐた」通ることは無用だ！

女房乙「穴の長さ以上に歩いて來たのが、踏みとまつて」さうか、

ね——

女房甲「後ろ向きのままその方を見て」 まどくしねいで、ま

はんやよ！

女房乙「あと戻りしながら」 今まで便利に通して貰つたのに、
な。お竹さんが落ち込んだのがいけなけりやア、穴
を埋めたらいいぢやアねいか、ね、わけもねいいこッ
たのに、な。

女房甲 大さにお世話だ！

百姓甲 道路ぢやアねいんだ！

女房乙「三角點から曲つて、舞臺向つて左り手の奥へ通ずる道を、怒つ
た様子でつか／＼歩み行きながら」 通して呉れたツてよか
らうに、なー——

女房甲「後ろ向きになつてたので、直ぐ女房乙の方へ目をやつて」 通

さうが、通すまいが、こッちの借りてる地面なら、
こッちの勝手だ。——お前めえんとこのお初はつは、な、氣
ままで奉公が出来ねいほど結構なお姫様ひめさまだよ。

女房乙 それこそ、大さにお世話だ——まだ片輪など

にやアならねいから、な！

女房甲 さぞ立派な奥さまにお成りなさう——あの

お顔で、な。

女房乙 お前めえんとこのは何だ——おかめとひよつとこ
とを突きまぜたやうで？

百姓甲「前向きに鉢を使つてゐるまま、自分の右から顔だけちよつとその
方へふり向けて」 畜生！とツとと行きやアがれ！おかめ
でも、ひよつとこでも、な、手前てめえ等のやうに都會も
のの世話にやならねい！

女房甲 さう、さ、ね、馬鹿！

「またうつ向きになつて、芽を植えながら、舞臺の前方へあとすさり」

女房乙「奥の三角點から、舞臺向つて左り手の前方へ道をまはつて來
ながら」 へん、斯う通つてゐりやア、何とも云へめい、
さ——菱餅ひしもちのやうな畑など通して貰はねいでも。

百姓甲 かちやりと云つたと思つたら、おい「と、女房
甲に向ひ、左りの手は鉢に着け、そして右の手に拾つた物を見せなが
ら」 こんな石があつたぞ。

女房甲「返り見はしないで」 また通りすがりの子供でも投げ

てツたのだらうよ。

「電車の音。」

百姓甲 また来やアがつた、な！「石を持った手を舉げる。」

女房乙 ……「わざと横を向いて舞臺向つて左り手の前方まで出

た時、渠の突差の叫びを聴いたので、自分に向つて發せられたのだと思ひ込んだやうに、退場眞きは驅け出しながら、渠の示を見る。」

百姓甲 えい！「聲にも右の手にも力を入れて、正面から、舞臺

向つて右手の方へ石を投げる。」

(一〇) 女房甲、百姓甲

女房甲「後ろ向きだが、顔心配さうに百姓甲の方へ向けて」お前さ

ん電車に石を投げたんぢやアねいか、ね？

百姓甲「前向きに鉄を働かせながら」投げたくもならア、な。

女房甲 でも、罰金どころぢやアねいぜ。

百姓甲「軽く」誰れが知つてるもんか？

女房甲 でも、ね——「なほ心配さう。」

百姓甲 ……

「渠は無言で、さア済んだと云はぬばかりに、自分のそばの三角點の向ふ側の道に出て、女房甲のまだ植ゑ残りの分を急いでるのを見な

がら、鉄を立てたその上に自分の兩手を置いて、からだをずつと延ばす。」

女房甲「植ゑ付けを急ぎながら」わしも直ぐ済ませるが、な

百姓甲「ふと思ひ出したやうに、立てた鉄を離れて、三角點のそのさきへ行き、土堤下の線路をのぞいて見て、ぎっくりしたが、何氣ない振りをして、鉄の立つところまで来て」電車がとまつてらア。

「聲が願えてゐる。」

女房甲 え！當つたんぢやアねいか、ね？「心配さうに渠の顔を見る。」

百姓甲「わざと落ち付いて」當つたツて、かまうもんか、誰れのせいとも分らねい以上は？

女房甲 さうかも知れねいが——「また植ゑ付けをしながら」

道理で何だか胸騒ぎがしてイたんだらう。ゆふべから日が悪いのか、あの兒はおほ怪我をするし。お前さんはうなひ方がうまく行かぬいし。わしまでも亦あんなかみさん等と喧嘩をするし。まさか、辛^{から}しの交ぜッことをしてゐるんぢやアあるめいし、さ、この

芋ばたけもどうせ碌なことアねいぜ。二度あること
ア三度あると云ふし、な。

百姓甲「鎌を肩にかけて、少しからだを豫期の恐怖に顫はせながら、その道を、向つて左りの方へ進んで、女房の植ゑ付けたあとを見まはりながら」人間はどうせ、病氣でなけりやア喰へねいで死ねんだ！

女房甲「手をちよつと休めて、渠の方を向き——この時は、かの女のからだは前向きにしゃがんでゐる」またいつもの焼けになつてさ——しツかりかせがねいと、あの兒にも可哀さうぢやアねいか、ね？

百姓甲 なアに「と、意地悪くまた憤慨の様子で、奥の三角點を反對の道路に曲つて前方に歩きながら」あいつまでが都會くさくなりやアがつて——とう／＼おらの心までも三角畑にしやアがつたんだ！

女房甲 三角だツて、四角だツて——「また一心に手を働かせろ。」

百姓甲「向つて左りの手の道路の長さの眞中ごろに立ちどまつて、肩から鎌をおろし、それを杖について、女房の方に」去年は、立

派な屋敷の奥さんが女中と一緒に、あの多吉の畑を掘つて、赤い芋を盗んだことがあつた。ことしやア今から、おら達の娘が掘り返された。都會ものとなやア、まるで、泥棒か色事師だ。

女房甲 だから、今のうちに金にしておやりよ——どうせ、折れた芽は二度と物にやアなるまいから。

百姓甲「鎌の上に兩手を乗せたまま、からだをゆすつて」ああ、もう、焼けだ——おらア世の中がいやになつた！「少し間を置いて、半ば獨り言のやうに」金があつたツて、百姓が圓くなり四角なりに落け付ける所があるかい？

女房甲 わしもやツと濟ませたが、な——「とツ先きの三角點外で、明き籠の中の泥をはたき落し、兩手をもはたいてから、立ち上つた。」

百姓甲「かの女の立つてるところまでを自分の方から見渡して」何だツて、お天道さんはおらの畑をこんなに三角がたに縮めて來たんだ？

女房甲 でも、けふは照らず降らずで結構だア、ね。

「かの女もちよつと、渠がしたやうに線路の方をのぞいて見たが、びっくり、あわててふり返り、舞臺前方の道を烟に觸れないやうに、真ん中ごろまで小走りにやつて來たり」今の奥さんがハンケチで繻帶をして來るが、ね——

百姓甲

………「更らにぎつくりして、暗鬱と忿怒と恐怖との混亂。」

女房甲「云つて聴かせるやうに、そして腰を曲げて顔だけを渠の方へ突き出し」黙つて、ね——感づかれちやアいけないよ。

「かの女はもとの三角點をまはつて、奥へ通る道路の端へ立つ。」

(一一) 老母、細君風(百姓甲、女房甲)

老母「先きになつて、細君風の左りの手を引いて、女房甲の顔を覗みつけるやうにして出て來て」またあぶないよ——例の落し

穴だから、ね。

細君風「白のハンケチをつないだので頭を額の方まで繻帶してゐるが、

なほその額を繻帶の上から右の手で押さへて、引かれながら」はい。

老母 電車に石を投げたりして、さ——どいつだか

大抵分つてゐる、わ、ね!

細君風「いたさうな様子だが、氣のないやうな聲で」さうですと

も!

「百姓と女房とは、兩方につつ立つたまま、青ざめて、ぢつとその方を見詰めてゐる。」

老母「舞臺向つて左りの方を見て、氣がついたやうに」あ、巡査が來るよ——直ぐ云つて置かうよ。

細君風

………

「この兩人はその方へ退場して行く。百姓夫婦はどうしようと云ふやうに、烟を隔てて、顔を兩方から見合せる。」

(一二) 女房甲、百姓甲

女房甲「聲に顔を^ま帯びて」いい氣味だが、な——

百姓甲「これはまた一しほおちけづいてるが、わざとにも強さうに」天

罰^{てきめん}靨面だア、ね——あいつの淫亂亭主の罪が報^{むく}つて

あらの娘のかたきがひよつくら取れたやうなもんだわ!

女房甲 でも、巡査が來たら、どうする?

百姓甲「舞臺向つて左りの方を見込んで」へん、畜生! 「少しゆつ

くりした口調で、女房の方に向き直つて」あらが投げたとアさあつてねいや。

(一三) 老母、巡査、女房甲、百姓甲

女房乙、細君、百姓

老母「今退場した方から、細君風の手をもとの通り引いて、他のもの等の先きに立つて出て来て、遊んでゐる左りの方の手で穴の方をゆび指しながら」兎に角、あのやうな穴を明けてあるので
すから、ね。

巡査「おほ股に歩き抜けて、前方の道を一杯に進み行き、穴をのぞきながら」成る程、大きなやつを明けたものだ。

女房甲「……………」「青くなつてだが、巡査の目の落ちるところへ、自分のも落てる。」

巡査「かの女に」これはお前とこの亭主が掘つたのか？

女房甲「おづ／＼して」へい。

百姓甲「……………」「向ふの方で、舞臺へ後ろ向きで、巡査のゐる方は反對に横向きになつてゐる。」

巡査 不都合なやつだ！

女房甲 でも、うちの畑を通られて困りますので――

巡査 然し、今聴くと、お前とこの娘がゆふべ落ちておほ怪我をしたといふぢやアないか？

女房甲

へい――

巡査 こら、鶴松！

百姓甲 「……………」「その聲の方へちよつと振り向いたのが、自分の方へ巡査がまはつて來かかつたのを見て、立てた鍬を置き去りに、奥へ逃げ出さうとした。」

巡査 こら、待て！

百姓甲 へい。「おづ／＼答へて、踏みとまる。」

女房甲「巡査が畝を踏みたたたくつて行くのを見て」今植ゑつけたところでごぜいますが、ね。

巡査「百姓甲のおづ／＼立つてる道へ出てから、渠に」貴様は今何をした？

百姓甲「少し返答にまごついてから」芋の植ゑつけをしてをりました。

巡査 そのあひだに、電車に石を投げただらう――？

百姓甲「白ばツくれて」いえ、そんなことは致しません。

女房乙「これもこの前から百姓乙と共に出て老母並に細君風の後ろにゐたのだが、この時巡査のあとに驅けて行つて、百姓甲に」わしが今見たんだよ。

巡査 ふといやつだ！「二つ横ツつらを喰らはせてから」こ

ツちへ来い！「と、肩のところをつかまへて、引ッ張る。」

百姓甲 ……………「からだは引ッ張られても、腹には少なからず反抗

のおもみがある様子。」

巡査 こツちへ来い！「またぐいと引ッ張る。」

百姓甲 ……………「引ッ張られながら、踏みこたへる。」

巡査 来い！

「引く、こたへる、この兩勢の中心がそれて、巡査が先づ畑の中へ踏み入つたが、百姓甲も一二歩踏み込んだのが最後の焼けッ腹になる初めて、巡査の力を一二歩引き戻して、もとのままに立つて鉄の柄の中ほどを右の手に攫むと、また巡査の方に引ッ張られる。」

百姓甲 ……………

巡査 来い！

「いよく二人とも畑の中へおのづから踏み込んだことになる。」

女房甲「穴のある三角點を前方の道へまはつて来て、顔に怒りを帯び」

なんぼおまはりさんだッて、人の畑を踏みくちやに

して、さ——「少しおだやかな口調になつて」うちのア電

車に投げたんぢやア御座いません。

巡査「かの女に」現に、あのお方の「と、細君風のゐる方を見

せて」顔に當つたぢやアないか？

女房甲 どこかの子供でも——

巡査 馬鹿を云へ！

女房乙「奥から舞臺向つて左り前方への道から、ば獨り言らしく」それこそ、子供のやうなうそを云つてらア！

巡査「百姓甲に向き直り」貴様はもとからここのいらの注意

人物だ。一度は引き上げられるにきまつてたのだ。

百姓甲 なんだと？「いよく暗黒な不平家の本性を顯はして、

鉄をしつかりと握つて」警察までも、もう、都會もの等

の氣ままだや淫亂を手つたふまわしものかい？

巡査 何を——無禮な！「とツつかまへようとする。」

百姓甲 えい——どけ、どけ！

「渠は鉄を兩手に握つて、巡査の足もとを拂はうとしたので、巡査は

二三歩とび退く。」

老母「もとの場所に立つて見てゐたのが、細君風に」あそろしい

男だ、ねえ。

細君風「手を取られてゐるままで」さやうです、ね。

女房甲 お父さん、手荒いことはしなさんなよ。

百姓甲 あらア、もう、覺悟だ——この畑までこんな

に荒されるほどなら、いッそのこと、自分でみんな
荒してやらア!

女房甲 そんな無茶苦茶云つたッて——

百姓甲 なアに、かまうもんか! ええッ!——ええッ

! うん!——うん! 「と、鉄を左右にかたみがはりに振つて
うなりながら、畑のおもてを崩す。」

女房甲 父さん! 「飛び込んで行つて、中央に荒れる渠の、向つ
て右の方から、とめようとする。」

百姓乙 「かの女とは反對の方から、これも飛び込んで行つて、あまり惜
しいと云ふやうな風で」 あい、あんまりむごいことはす
なよ——あんまり。芋畑に罪アねい、わ、な。「とめ
ようとする。」

老母 「段々おち氣づいて來たやうに」 まるで氣違ひだ!

細君風 「聲が願えて」 さう、ね。

女房甲 父さん! 「思ひ切つてとめようとして、鉄で足をすくは
れる。」 あ、いてい! 「倒れる。」

百姓乙 あぶねいぢやアねいか? 「思はず、とめに飛び込ん

て行く。」

百姓甲 この密告め! 「鉄をあげて百姓乙の胴ッ腹をなぐり付
ける。」

百姓乙 いてい! 「倒れる。」

女房乙 なにしやがるんだ、うちのを? 「畑にとび込んで
から、途中にまごつく。」

百姓甲 「百姓乙をちツと蹴みつけて」 あらの事を密告させやア
がつて! いッその事なぜ娘の夜這の密告しねい……

細君風 行さましよう。

老母 あぶないから、ね。

巡查 久原さん、ちよツと待つてゐて下さい。「と、
最後の二人が退場しかけるのをとめる。」

老母、細君風 …… 「共に黙つてたが、顔を見合せながら、迷惑
さうに、また氣味が惡さうに踏みとまる。」

巡查 鶴松! 貴様は電車妨害、官吏侮辱、殺人ま
たは身體傷害、二重にも三重にも犯罪者だぞ!

百姓甲 「巡查をまた蹴み付けて目は燃えてゐる」 それでも、な、

あらア都會もののやうにやア人の畑にも踏ん込まぬ

！人の娘を無斷で盗みもせぬ！あの縋帶をしたかみさんの「と、細君風の方を注意させて」亭主なんかを見ろ

——おらの娘を無斷で呼び出しやがつて、毎晩、あの廣ッばで「と、舞臺向つて左り手の前方を見やつて」自由にしやアがつてたぢやアねいか？

女房乙 お前^{めえ}んところア締りがねいんだ——それであの穴へ落ッこちやアがつて！

百姓甲「それに頓着せず」その天罰がとう／＼かみさんに報つて、あのざまア見ろ！

巡査 そりやア、人の娘を無斷で呼び出すのもよくないが——まア、その鍬を置け。

細君風 ……「突然、泣き崩れかける。」

老母「細君風に向つておも／＼しく」何を泣きます？

細君風 ……「なほ黙つてたが、姿勢を直す。」

老母「かの女を引いた手を放して、少し前へ出て」うちの主人にそんなみだらなことは、家名に誓つて、御座りません。

百姓甲「今度はその方を殴み付けて」何も知らねいで、畜生！それがみんな都會ものうそだぞ！

巡査「も、渠の勢ひをおそろしがつてゐるやうだが、聲だけは命令的に」まア、鍬を置け。

女房甲「足が痛む様子で、半身を起し」おまはりさん、娘の手つけ料をあのかみさんに貰つて呉れねいぢやア、とても、あの兒とわしの療治代は出ません。

女房乙「少し進んで」それよりやア、うちの人は死んでるのか——生きてるのか？

百姓甲 どうでもいいや！

女房乙 ……「渠ににらまれて、またあとずさりをする。そして遠くから」お父^{とつ}さん！ お父さん！

百姓乙「倒れたまま、うなる」ううん——とても、助かるめ

女房乙 ええッ！「びっくり。」

老母「今少し進み出て、愛相笑ひをしながら、巡査に」念の爲めにあなたに申し上げて置きたう御座いますが、ね、

うちの主人に於いては決して——

巡査「おもくしげに」いや、お宅の御主人はその點では評判がよくないのが、警察にも知れてゐます。

老母 でも、そんなことは——

巡査 ぢやア、此間、神社の森で探偵に見つかったのはどこの御主人です？

老母 ……………「ぎっくりして、一二歩あとずさり。」

細君風 わッ——「と、こらへ切れないで泣き出す。」

百姓甲 ……………「ちつとその方を横向きに見つめてゐたのが、正面を向いて、暗鬱な顔でにっこりと笑ふ。」

女房乙 父さん、しッかりしなよ。

百姓乙 ……………「返事をしない。」

女房甲 お前、人を殺して濟みますか？

百姓甲 人の死ぬ、生さるをあらが知つたことけい？

巡査 兎に角、鶴松、鉄を置け。

百姓甲 よく分つた警官に面じて、あらは、もう、あ

きらめてやる——えい！「と、鉄を力一杯出して後ろの方へ投げる。それから、畑の真ん中に、正面向きに、どッかりあぐらをか

いて、あまり氣張らないで」さア、殺すなり、縛るなりし

て貰はう。この畑の真ん中で取られりやア、おらア本望だ！

巡査 ……………「黙つて用意の綱を出してゆるめる。」

老母「巡査に」では、只今お呼びとめになつたのは——

？

巡査「かの女に」もう、大抵分りました——いづれ、

また改めて——

老母 左様で御座いますか？「また愛相笑ひをして、細君

風の手を取つたのが、何だか心残りがする様子。」

女房乙 うちのをどうして呉れるんだ？

女房甲 ひよんなことになつた、なア！

百姓甲 ……………「ちつと下を向いてゐる。」

巡査 ……………「無言で、綱を以つて百姓甲に近づく」——幕